

第55回

地区踏査で 地域と地域の人を知る

静岡県・浜松市国保佐久間病院長

三枝智宏

はじめに

浜松市国保佐久間病院は、静岡県浜松市の中心部から北へ直線距離で約50km、愛知県と長野県に接する天竜川中流部に所在する。人口約5,000人、高齢化率60%超の浜松市天竜区北部（旧佐久間町、水窪町、龍山村）を診療圏とする一般36床、感染4床の小病院で、入院のほか外来診療、在宅医療を通じて周囲の施設とともに地域包括ケアを担っている。当地では地域包括ケア実践のための手法として地区踏査（まちあるき）を取り入れているので、その一端を紹介する。

一人ひとりの患者・利用者を支えるためには、家族や私たち保健・医療・介護・福祉を担う専門職（健康福祉系多職種）ばかりでなく、地域の力が必要である。さらに介護予防や地域づくりなどを集団で行う場合は、ますます地域との協働が重要となってくる。すなわち、地域包括ケアの実践のためには地域を知り、そこでの生活を知ることが不可欠である。

ところが、健康福祉系多職種は必ずしもその地域に生まれ、生活しているとは限らない。在宅ケアに携わっていれば地域の状況を知る機会もあるが、勤務時間中は病院や施設から離れられない部署に所属している職員も多い。地域包括ケアに携わる一員として地域と接する機会を持つことは重要であるため、地区踏査などで地域の匂いを感じることを勧めている。

本稿では地区踏査として通院実習、さくまっぷ、防災まちあるきについて紹介する。なお、文中の健康福祉系多職種とは佐久間病院に限らず、当地で地域包括ケアを担う者すべてを示す。



写真1 斜面にへばりつくような集落を登る

通院実習～佐久間町初心者～

佐久間病院には地域医療研修として年間20名前後の初期研修医が訪れる。そのほとんどが当地に初めて来るので、佐久間町初心者と勝手に名付け、通院実習を必須としている。通院実習は通院する患者に同行して、病院外の患者の姿や通院手段に接してみようという趣旨で行われることが多い。佐久間町は谷沿いや山の中腹に30か所前後の小さな集落があり（写真1）、ふれあいバスという公営バスを通院手段としている。当院の通院実習ではこのふれあいバスとJR飯田線の2つの交通機関を利用している。もっとも研修医が乗車することで、ふれあいバスの乗車定員オーバーとなる事態を避けるため、患者の利用が少ない時間帯に乗車することとなり、患者の通院に同行する点は断念している。

病院でふれあいバスに乗り込み、九十九折になった道に揺られながら山間の集落を巡った後、道路沿いにある無人駅でJR飯田線に乗り換え、病院最寄りの有人駅に戻ってくる、ただそれだけの実習であるが、帰院後の振り返りがポイントである。感想を



写真2 無人駅の点字ブロックと手すり付きスロープ

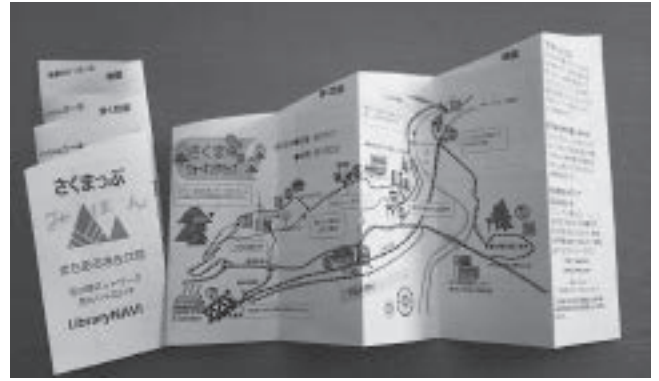


写真3 配布用さくまっぷ

尋ねると、「山の斜面の集落にドキドキした」「患者の通院の大変さがわかった」「バスで1時間かけて行ったのに帰りは飯田線の長いトンネル一本ですぐ着いてしまった」など、地形を体感した感想が相次ぎ、駅の違いを問うと都会に住む彼らは無人駅の驚きと有人駅の利便を訴える。

有人駅にある階段というバリアと無人駅の点字ブロックや手すり付きスロープ(写真2)の優しさの対比は指導医の指摘で初めて気づくことが多い。しかし、そのことで地理的ハンディを克服しようとする工夫を感じる視点を持つことができる。バスの中での運転手と利用者たちの気さくなやりとりや、バス停でなくても家の前で降ろしてくれるおおらかさに感動しつつも、誰かが下車するとしばらくはその人の話題に花が咲く変わり身の早さに戸惑うなど、地域住民の気質を実感する刺激的な経験のようである。

○通院実習

- ① 地域の地形的特徴を実感することができる。
- ② 高齢者等の通院の苦労を実体験できる。
- ③ 地域に住む人の気質に触れることができる。

さくまっぷ～地域再発見～

「さくまっぷ」とは、そのまま佐久間の地図という意味である。まちあるきをしたうえで見聞した内容を地図上に落とし込み、配布できるように体裁を整える。たとえ地元出身であっても、得てして居場所以外の地区のことは知らないものである。知っているつもりでいても、自宅と病院を往復する日常の中に埋もれてしまう景色もある。せっかく地域と

関わる仕事をしているのであるから、いろいろ地域のことを学ぼうというスローガンで企画した。ただし、医業とはかけ離れていて病院の予算はつかないので手弁当で行っている。

まちあるきの範囲は自治区単位とし、健康福祉系多職種以外にも広報して、広く参加者を募っている。地元をよく知る人に案内をお願いし、よい所探しを課題として、おおよそ2時間程度で地区の中を歩いて回る。「ここにはかつて、猟師の獲ってきた猪などの解体所があったんですよ。ここから見ていると、ヒトの体温を感じて猪についたダニがゾワゾワと寄ってくるのがわかるんです」「ここには小学校があって、この台座の上には二宮金次郎が乗っていました」など、地域の変遷を感じながらそぞろ歩く。帰着後は小グループに分かれて、見聞してきたことを振り返りながら、地図に書き加える作業を行っている。その後、観光客等にも配布可能な形で印刷した(写真3)。

「この地区は意外に階段が多い」「手すりがほしい」「大回りになるけど、こちらの道のほうがなだらかで歩きやすい」など、健康福祉に携わる眼でみた気づきのほか、この地区にも「いぼ神様」がある、地域のはずれには疫病が地区に入らないように塞ノ神が祭られているなど、地域固有の健康意識、疾病対策を感じることもできる。一般の参加者も募集したことで地域の異分野の人とともに歩き、話し合うことができた。市立図書館の司書と関わりができたことにより、佐久間病院の住民向けミニ講座の際に図書館から書籍紹介コーナーを出展したり、図書館に地域内の健康福祉に関わるコーナーが新設されたり



写真4 ノルディックウォークでまちあるき



写真5 小グループに分かれて調査

した。何よりこの取り組みでさくまっぷの体裁を整え、配布可能な形にしてもらうことができた。また、観光協会とつながることができ、観光イベントへの協力ができるようになったのも収穫であった。

コロナ禍などにより2年以上開催されていなかったが、最近ノルディックウォーキング講習も兼ねてまちあるきを再開したところ、開催地区の住民も含め多数参加し好評であった(写真4)。健康づくりという新たな要素も加わった。

○さくまっぷ

- ① 生活につながる地形の特徴を直接感じることができる。
- ② 地区内の習俗を感じることができる。
- ③ 健康福祉系以外の分野の人とつながることができる。
- ④ 健康づくりの一環にもなる。

防災まちあるき

～地域と多職種のコラボレーション～

国診協が2017年度に行った「医療・介護を必要とする者が安全に避難し、被災後も継続的に医療・介護を受けることができる体制を作るための事業」に参加した。当院の訪問診療患者にも在宅人工呼吸実施者がおり、災害時の避難方法を検討していたこともあり、タイムリーであった。災害対策基本法により市町村には障がい者、要介護者などの避難行動要支援者名簿を作成することが義務付けられており、発災時には本人の同意なく名簿を提供できることとなったほか、平時においても同意の得られた者の名簿を警察、消防、民生委員、自主防災組織等に

提供し、避難のための個別計画の作成をうながすこととなった。しかし、個別計画の作成は全国的に停滞しているのが実際であった。この要因には個別計画が義務ではなかったことも挙げられるが(現在は市町村の努力義務となっている)、名簿を渡された地域の側に医療・介護の知識が少なく、計画作成が困難だったことにも起因している可能性が考えられた。この事業では、個別計画を地域と健康福祉系多職種が協力して作成することを試みた。

佐久間町には住民の居住する自治区が30か所前後あるが、アンケートを行ったところ個別計画が完成している地区からまったく意識していない地区までさまざまであった。そこで個別計画未完成の地区をピックアップして、個別計画を作成することを検討した。浜松市行政の防災担当とともに地区の自主防災組織を訪問して趣旨を説明し、地域、行政、健康福祉多職種の3者協働で事業を行った。

個別計画では情報の伝達、避難の支援、安否確認、避難所での滞在についての記載が大切であり、地域と健康福祉系多職種の協力が不可欠である。避難を支援するには避難経路の情報が、また医療福祉ニーズのある者が滞在するためには、避難場所の立地や構造などの情報が必要であるが、地区外居住者には避難場所の位置やそこに至る経路の様子をほとんど知らない。そこで防災まちあるきをして地区内の様子を確認することにした。当日は地区の避難場所である集会所に集合して避難場所の構造等を確認後、地区内をエリア分割して担当する複数の行動班に分かれ、地区の役員等の案内で道路・通路の状況を見聞した(写真5)。1時間30分ほどで集会所に戻り



写真6 帰着後のグループワーク



写真7 防災マップ

行動班ごとに得られた情報を地図に記入した(写真6)。

地区役員の熱心な呼びかけで一般住民も予想以上に多数の参加を得られ、健康福祉系多職種とともに地区内をにぎやかに歩き、見聞することができた。道中では「ここを車いすで下るのは怖いね」「階段の段が高くて歩きにくい」「ここに置かれているベンチはありがたい」など、地区住民にも再発見がたくさんあった。地図への落とし込みにも積極的に参加してそれぞれが一体感を感じることができた(写真7)。

防災まちあるきの結果をもとに個別計画を作成したほか、避難場所の利用方法、運営方法も地域住民と検討することができた。さらにその計画をもとに地域防災訓練の折には避難行動要支援者の避難訓練も地域の人とともに行うことができた(写真8)。地域と健康福祉多職種、行政が協働体制を構築したことをベースとして、防災以外の活動にも広がることが期待される。

○防災まちあるき

- ① 地区の住民組織と健康福祉系多職種の協働体制を構築できる。
- ② 住民の生活の場を間近に感じることができる。
- ③ 地区内の防災意識を高めるとともに、個別計画作成が促進される。
- ④ 住民にとっても地区内の再発見につながる。

地区踏査は 地域包括ケアの実践に効果的

私たちは地域包括ケアを実践するために、健康福



写真8 計画に基づいて避難訓練

祉系多職種間の連携・協働を模索している。それと同時に地域の地理、社会、文化、そこに住む人を理解し、地域と協働することも重要である。地域を知り、地域の人を知る手段として行っている地区踏査について紹介した。地区踏査の目的はさまざま、それによって方法も異なるが、大切なのはまちあるき終了後に振り返りを行うことである。そこで地区の様子を反芻し、新たな気づきが生まれることもある。そして、情報を地図に落とし、新しい地図を作ることにより、達成感、充実感も得ることができ次へのステップともなる。

ただし、まちあるきは思い立ってすぐにできるものではない。該当する地区や関係機関との打ち合わせは必須であるが、つながり方がわからないこともありうる。そのためにも、健康福祉系多職種の間で思いを共有する、誰かに相談して仲間を作ることが重要である。その中から外部とのつながりが生まれてくることが多い。

地区踏査は地域包括ケアの実践に効果的な手法であると同時に、地区踏査を企画すること自体が多職種連携・協働のひとつの形となっている。